

# 1930年代のギャング映画の英語 — 『民衆の敵』と『暗黒街の顔役』

山口 美知代

## はじめに

1926年のトーキーの登場によりハリウッド映画には音声言語が加わった。その後、映画で用いられる英語は映画の進化とともに変化していく。本稿では、1930年代に隆盛した映画ジャンルのひとつであるギャング（犯罪集団）映画を取り上げて、そのなかで用いられた特徴的なスラングについて考察する。

## 1 1930年代のギャング映画

### 1.1 ギャング映画の系譜

トーキーの登場により、音がついていることのメリットを最大限に生かしたジャンルの映画が作られるようになった。銃声が人を引き付けるギャング映画もその一つである。この他に、歌や音楽が重要な役割を果たすミュージカル映画・音楽映画、台詞の掛け合いによるコメディ（喜劇）、特に、男女の間の機知に富む早口の台詞の掛け合いが特徴的なスクリーンボールコメディなどがあった。このなかで本稿では、ギャング映画について述べる。

1930年代にギャング映画が好まれた社会的背景には、禁酒法時代（1920-1933）に犯罪集団（ギャング）による酒の密造、密売、銃を用いた暴力行為が目立ったことがある。1929年の大恐慌以降の不況による社会不安も、犯罪者への共感を呼ぶ要因となった。

ギャング映画自体はサイレント映画にもあった。D.W. グリフィス監督の『ピッグ・アリの銃士たち』(*The Musketeers of Pig Alley*, 2012) から始まり、J. V. スタンバーグ監督の『暗黒街』(1927) に至る系譜である。その後、トーキー登場直後の1930年代から40年代にかけて、ギャング映画というジャンルが興隆する。この時期のあとも、1960年代後半のアメリカン・ニューシネマの代表作のひとつであるアーサー・ベン監督の『俺たちに明日はない』(*Bonnie and Clyde*, 1967) や、1970年代のニュー・ハリウッドの誕生に貢献したフランシス・コッポラ監督の『ゴッド・ファーザー』(*The Godfather*, 1972) シリーズなどハリウッド映画の各時代において、ギャング映画は一定の人気を持つジャンルとして作られている。その先鞭をつけたのが、1930年代、40年代のギャング映画であった。この時期の代表的なギャング映画『犯罪王リコ』(*Little*

Caesar, 1930)、『民衆の敵』(The Public Enemy, 1931)、『暗黒街の顔役』(Scarface, 1932)がある。これらの映画は現在(2023年9月)の日本でも英語音声・日本語字幕のDVDが流通している。特に本稿では『民衆の敵』と『暗黒街の顔役』を取り上げる。『民衆の敵』は初期に成功を収めたギャング映画の一つで、その後のブームを導くことになる。トムを演じたジェームズ・キャグニーの出世作となった作品である。『暗黒街の顔役』は、アル・カボネをモデルとして描いた。

## 1.2 ギャング映画と倫理規定「プロダクション・コード」

ギャング映画の主題や暴力的な描写は、映画業界の自主管理的倫理規定であるプロダクション・コードによれば容認しがたいものでもあった。プロダクション・コードは「道徳上、推奨されるべきトピック、不適切とされるもの」をリストアップし「映画を良いものにも悪いものにもなりうる内容をもつものと位置づけたうえで、内容上の取り扱い可能な範囲を定めた」(北野2017:116)ものであった。

プロダクションが導入されたのは1930年、その遵守が上映に際して義務化されるのは1934年のことであった。義務化以前の「プレコード映画」の製作過程でも、プロダクション・コードを管理するMDPPA(Motion Picture Producers and Distributors of America、全米映画製作者配給者協会)との連携は必要だった。

ギャング映画において、犯罪者を美化(glorify)しているわけではないといった字幕が映画冒頭に出てくるのはそのためである。

### 【民衆の敵】

『民衆の敵』の場合を見てみよう。映画の最初に、字幕による説明があり、ギャングを美化するものではないことが説明される。なお、字幕はすべて大文字で記されているが次の引用は小文字に改めている。映画の最初に示される字幕は次の通りである。

(1) It is the ambition of the authors of 'The Public Enemy' to honestly depict an environment that exists today in a certain strata of American life, rather than glorify the hoodlum or the criminal. While the story of 'The Public Enemy' is essentially a true story, all names and characters, appearing herein, are purely fictional. (0:01:25)

『民衆の敵』の作者たちの願いは、アメリカ人の生活のある層に今日存在する環境を正直に描くことであり、ならず者や犯罪者を美化することではない。『民衆の敵』の話は本質的に実話であるが、ここに現れる名前や登場人物は純粋なフィクションである。

また、映画の最後に以下の字幕が現れる。

(2) The end of Tom Powers is the end of every hoodlum. The 'Public Enemy' is not a

man, nor is it a character—it is a problem that sooner or later, we, the public, must solve.  
(1 : 22 : 15)

トム・パワーズの最後はすべてのならず者の最後である。「民衆の敵」は人でもなければ、登場人物でもない—それは早晚、我々民衆が解決しなければならない問題なのだ。

犯罪者の人生を美化して描いてはいけないという意識のもとに挿入される字幕であるが、映画自体は、トム・パワーズの人生が人を引き付けるように劇的に描かれている。

映画はシカゴに住む主人公トム・パワーズの負の成長物語として描かれる。1909年の子ども時代の盗癖が描かれ、1915年に本格的に犯罪に手を染める様子、そして、第一次世界大戦へのアメリカの参戦、兄の出征と母の嘆き、その後、禁酒法時代になりトムが酒の窃盗、密造、密売をしながらギャング同士の抗争に巻き込まれていく様子が描かれる。トムの物語に並行して、脇筋では対照的にまじめな兄の物語も描かれる。兄は子供時代から勉強が好きで、弟の非行を快く思っていない。模範的な市民として徴兵、出征、帰国、結婚とライフステージを進めていく様子が描かれる。トムは、兄のほうが母親に愛されていると考えてきたことが映画の後半で語られる。激化するギャングたちの抗争に巻き込まれたトムが映画の最後で変わり果てた姿で帰宅する場面は、衝撃的である。弟の遺体を見て呆然とする兄の表情が写り、息子の無事の帰宅を信じて寝室を整える母の歌声が流れる。

### 【暗黒街の顔役】

1930年代のもうひとつの代表的なギャング映画である『暗黒街の顔役』は『民衆の敵』に比べると暴力の描写がさらに激しい。原題 Scarface は禁酒法時代のシカゴで酒の密造密売を行い、機関銃を使って多数の死者を出し、暴力的に街を支配した実在のギャング、アル・カボネ (1899-1947) のニックネームである。映画はフィクションである旨断っているが、実際にアル・カボネがそうであったように、機関銃を用いた殺戮の場面が多い。機関銃連射による銃声、破壊される建物の音など、暴力的な描写が量的も質的にも多い。

『暗黒街の顔役』でも『民衆の敵』と同じく、映画冒頭に中間字幕で、この映画の意図が語られる。ギャングの支配と政府の無策を告発するための映画だというのである。

(3) This picture is an indictment of gang rule in America and of the callous indifference of the government to this constantly increasing menace to our safety and our liberty. Every incident in this picture is the reproduction of an actual occurrence, and the purpose of this picture is to demand of the government: "What are you going to do about it?" The government is your government. What are YOU going to do about it? (0 : 01 : 10)

この映画はギャングがアメリカを支配していること、我々の安全と自由への脅威が常に増加していることにたいして政府が平然と無関心であることへの告発である。この映画のあらゆる出来事は実際に起きたことの再現であり、この映画の目的は政府に「あなた方はこれにつ

いてどうするのか?」と問うことである。政府とはあなたたちの政府である。あなたたちは  
 いったいこれについてどうするのか?

## 2 ギャング映画の語彙

### 2.1 ギャング映画に特徴的な表現

映画の台詞について特徴的なジャンルの映画を取り上げて考察した Kozloff (2000) はギャング映画を取り上げた第6章「武器としての言葉—ギャングスター映画の対話」のなかで、初期のギャング映画の台詞について次のように述べている。

(4) The very earliest sound gangster films acquainted audiences with a specialized vocabulary: *take him for a ride*, *grifter*, *cannon*, *mug*, *on the square*, *sucker*, *bulls*, *cut you in*, *lay low*, *the heat's on*, *bum rap*, *mebbe*, *cross me*, *muscle in*, *gat*, *rat on one's friends*; just as more contemporary gangster films offer *hitter*, *contract*, *whacking*, *hood*, *homeboys*, *bustin' my balls*, *wiseguys*, *made man*, and so on. The dialogue of gangster films is blatantly distinct from the language of other kinds of films. (201)

最初期の有声ギャング映画を通じて観客たちは特別な語彙を知るようになった。*take him for a ride* (彼を騙す), *grifter* (腐敗官吏), *cannon* (大型自動銃), *mug* (恐喝する), *on the square* (正直に), *sucker* (カモ), *bulls* (警官), *cut you in* (分け前をやる), *lay low* (身を隠す), *the heat's on* (追手が迫っている), *bum rap* (無実の罪), *mebbe* (たぶん), *cross me* (俺をだます), *muscle in* (割り込む), *gat* (銃), *rat on one's friends* (友人を見捨てる)。それは、より近年のギャング映画が *hitter* (銃), *contract* (殺しの請負), *whacking* (殺し), *hood* (刺客), *homeboys* (ギャング仲間), *bustin' my balls* (いらいらさせる), *wiseguys* (ギャング), *made man* (マフィアの正規メンバー) など。ギャング映画のセリフは、他の種類の言語とは明確に異なっている。

Kozloff (2000) が、最初期のギャング映画と呼んでいるのが、本稿で扱う 1930 年代のギャング映画である。ここに挙げられたで語のギャング映画の語義とその初出年を OED で調べると次のように記されている。OED の初出年はその語義の現れた目安となる。なお、一部形を変えている。

(5)

<i>take for a ride</i>	1925	騙す
<i>grifter</i>	1915	公的な立場(役人、政治家)を利用して不正を働く人。grafter から。
<i>cannon</i>	1914	大型自動銃
<i>mug</i>	1864	人を攻撃して奪う、特に公共の場所で。現在は通常の意味。
<i>on the square</i>	1668	正直に (現在ではスラング)

<i>sucker</i>	1838	騙されやすい人 (元北米から)
<i>bull</i>	1893	警官 (US スラング)
<i>cut in</i>	1890	分け前を受け取る、与える (US スラング)
<i>lay low</i>	1845	口語、元スラング 特に犯罪者について、発覚・注意を避けるために身を隠す
<i>heat</i>	1928	スラング (元 US) 警察と関わること、追跡されること
<i>bum rap</i>	1913	誤った判決、無実の罪 (元 US、主として US)
<i>mebbe</i>	1825	口語、地域方言 maybe
<i>cross</i>	1823	スラング 騙す 裏切る
<i>muscle in</i>	1928	スラング 力づくで割り込む、影響を与える
<i>gat</i>	1904	元 US スラング 銃
<i>rat on</i>	1912	口語 スラング見捨てる 逃げる

このなかで、*take for a ride*, *grifter*, *cannon*, *heat*, *bum rap*, *muscle in*, *gat*, *rat on* は OED の初出例が 20 世紀である。比較的新しい語・表現が 1930 年代のギャング映画のなかで用いられ、さらに観客に浸透していったと考えられる。その他、*mug*, *bull*, *cut in* の初出年 19 世紀後半で、*sucker*, *lay low*, *mebbe*, *cross* などは 19 世紀前半の語である。

また、Kozloff (2000) が後の時代のギャング映画の語彙としてあげている語について同様に OED で調べるとギャング映画の語義とその初出年は以下の通りである。

(6)

<i>hitter</i>	【該当語義なし】
<i>contract</i>	1940 スラング 元 US 誰かを殺す合意、通常対価を得て
<i>whack</i>	1973 スラング (元 US、主に US) 犯罪者、特にマフィアで、殺す、特に処刑する
<i>hood</i>	1930 =hoodlum ギャング、暴力的犯罪者
<i>homeboy</i>	【「ギャング仲間」に特化した語義は OED にはない】
<i>wiseguy</i>	1956 US スラング ギャング、マフィアの一員
<i>bust one's balls</i>	1946 スラング 元 US おそらくイタリア語の <i>scocciare le palle</i> 「誰かを苛々させる」から
<i>made man</i>	1973 スラング (元 US) 正式にマフィアのメンバーとなった人を指す

ここでは OED では関連語義が記されているものはすべて 20 世紀初出であり、特に、20 世紀後半初出のものも 3 語 (*whack*, *wiseguy*, *made man*) ある。それまでにはなかった語義が付け加わり辞書に入ったと考えられるがギャング映画がそうした語義を知らしめる手段にもなったのだ

ろう。

## 2.2 『民衆の敵』の用例

前項で挙げた初期ギャング映画特有の語は、例えば『民衆の敵』のなかでは以下のように用いられている。

(7) You know old Putty Nose always plays on the square with you, don't you?  
いいか、このパティ・ノーズはいつもお前たちにずるはしないぞ、わかってるだろう？

(8) Remember how I always said... when I got something good, I'd cut you in?  
いつも言っていただろう、何かいいものがあれば、分け前をやるって。

(9) I was afraid you might have brought Mike with you. That sucker.  
He's too busy going to school. He's learning how to be poor.  
マイクを連れてきたかもしれないと心配していたんだ。あのバカを。  
あいつは学校に行って忙しいんだ。どうやって貧乏になるか勉強してるんだよ。

(10) As far as I'm concerned, there's only two kinds of people: right and wrong.  
Now, I think you're right.  
You'll find that I am, unless you cross me.  
俺に言わせれば人には二種類しかない。正しい奴か間違った奴か。  
お前は正しいやつだ。  
俺もそうだとわかるさ、俺を裏切らなければな。

(11) You better lay low for a while. The heat's on.  
しばらく身を隠していたほうがいい。警察が探している。

## 2.3 その他の特徴的なギャング映画の語

### 【機関銃、酒、密売】

機関銃は第一次世界大戦期に実用化された。禁酒法時代に暗躍したギャングたちにも使われ、1930年代のギャング映画にも頻出する。『暗黒街の顔役』では、次の台詞に出てくる。

(12) And this is it. That's how I got the South Side for you and that's how I'm gonna get the North Side for you. Some little typewriter, right. I'm gonna write my name all over this town with big letters! (0:45:20)

そしてこれだ。こうやって南側は手に入れてやったし、北側も手に入れてやる。小さな機関銃だ。俺の名前を町中に大きな字で書いてやる！

*And this is it.* という場面には機関銃が映っている。銃撃音がタイプライターの打鍵の音に似ているところから、*typewriter* という語が機関銃 (*machine gun* および *submachine gun*) を指すようになった。*OED* の初出は1916年である。「自分の名前を町中に大きな字で書く」ことは、足跡を残す意味であるが、*typewriter* という機関銃を指す俗語と *write* (書く) という動詞が関連していることは言うまでもない。

この場面の続きにトニーは “Get out of my way, Johnny, I'm gonna spit!” (0:45:32) といって、機関銃を壁に向かって乱射する。spit は「貫通させる」の意味で、壁や壁際の棚に多くの弾丸の後が残る。“Come on fellows.” (0:45:41) と腕を振り上げて仲間と出ていくトニーのそばに立つ女性が機関銃の威力を見て恍惚とした表情を浮かべている。その後も街角で銃声が響き市民が殺されていく場面が連続して挿入される。またこれより前であるが、10月5日水曜日からの日めくりカレンダーが、機関銃で打ち抜かれていく様子が、トムが組織のなかで銃の支配によりのし上がっていく様子を描いている場面も印象的である (0:28:24)

警官たちは、機関銃の製造を禁止する法律はあるが流通を禁止する法律がないことを指摘する。“These fellows bootleg machine guns like they bootleg booze.” (0:46:30) の台詞は、「こいつらは、酒を密売するみたいに機関銃を密売している」の意で、bootleg は(酒を)密売する (*OED* 初出1906年)、booze は俗語で酒、特にアメリカではウイスキーなど蒸留酒を (*OED* 初出1859年) を指す。これらは、1930年代に現れた俗語ではないが、この時期のギャング映画でよく用いられる語である。

映画のなかには機関銃製造を禁止する法律はあるが流通を禁止する法律がないこと、法整備の必要性を警察幹部が新聞社長に語る場面があるが (0:51:38)、これも機関銃によるギャングの支配を美化しないための場面であろう。*typewriter* ではなく *machine gun* という語が使われている。“The city is full of *machine guns*. Gang war in the streets. Kids aren't even safe to go to school.” (0:52:13) “Don't blame the police! They can't stop machine guns from being run back and forth across the state lines. They can't enforce laws that don't exist!” (0:52:27) などである。

映画に出てくる語のなかで、特に1930年代によく使われるようになった語は述語的に使われる形容詞の *swell* である。Tony, you're swell. (0:19:03) 「トニー、すごいわ。」というのは、トニーが妹に小遣いをやる場面での妹の台詞である。この場合の *swell* は *excellent*, *splendid* を意味する形容詞で、俗語としてアメリカで広く使われるようになった。述語用法の *OED* 初出は1926年である。

## 結びに変えて

以上本稿では、1930年代のギャング映画『民衆の敵』と『暗黒街の顔役』に用いられているギャング特有の語を取り上げ、それらが映画のなかでどのように用いられているのを記した。また、こうした語のギャング的語義は1930年代以前から存在していたことがOEDの記載により確認できたが、ギャング映画で広く知られることになった側面もあると考えられる。

(注) 本論は科研費研究課題「アメリカ英語の普及と英語の多様性の認識に20世紀映像メディアが与えた影響」研究番号19K00688 基盤研究(c) 研究代表者山口美知代の成果の一部である。

## 参考文献

Decherney, Peter (2016) *Hollywood: A Very Short Introduction*. Oxford: Oxford University Press.

Doherty, Thomas (1999) *Pre-Code Hollywood: Sex, Immprality, and Insurrection in American Cinema 1930-1934*. New York: Columbia University Press.

Kozloff, Sarah (2000) *Overhearing Film Dialogue*. Berkeley and Los Angeles: The University of California Press.

Vasey, Ruth (1997) *The World According to Hollywood, 1918-1939*. Madison: The University of Wisconsin Press.

北野圭介 (2017) 『新版 ハリウッド100年史講義—夢の向上から夢の王国へ』東京：平凡社

村山匡一郎 (2013) 『映画史を学ぶクリティカル・ワーズ [新装増補版]』東京：フィルムアート社

山口美知代 (2020) 「プロダクション・コードと映画の英語 — 『風と共に去りぬ』の *damn*」

『京都府立大学学術報告 人文』第72号, 141-151.

渡辺幻・石澤治信 (2014) 『60年代アメリカ映画100』東京：芸術新聞社

(2023年9月28日受理)

(やまぐち みちよ 文学部欧米言語文化学学科教授)